キーワード

石垣 刻印 刻銘 川地義郎 石垣普請 丁場割図 石垣修理

はじめに

料として注目できる。まれた刻銘がみられ、築城時の情報を今も直接的に知ることができる資まれた刻銘がみられ、築城時の情報を今も直接的に知ることができる資金古屋城の石垣には刻印や刻紋と呼ばれるマークや大名家臣の名が刻

る。〈大村〉 寄贈されており、本稿ではこのうち名古屋城の所蔵資料について紹介す 石垣の刻印・刻銘の拓本資料は名古屋城総合事務所と名古屋市博物館に 時期に調査を行っていた人物として川地義郎氏がいる。川地が採拓した られており、刊行物も複数あるが(高田一九八九・一九九九・二〇一三)、同 これまで名古屋城の刻印・刻銘についての体系に調査には高田祐吉氏が知

川地義郎氏資料の概要

師・守衛として業務していた。昭和五十年代初めに退職しており、故人川地義郎氏は元名古屋市職員で、名古屋城管理事務所に配属され、庭

である。

贈)。 二十六枚、 その他の拓本軸装二幅を所蔵している (昭和五十年 (一九七五)頃に寄 それぞれの所蔵資料としては、 料の全数はおよそ八百点に及び、一部は軸装されているが、大半が半紙 三月八日寄贈)。名古屋市博物館では、軸装二十幅、未装七百八十一枚、 ト二冊、その他の拓本未装七枚を所蔵している(昭和四十九年(一九七四 のまま無造作にまとめられ保管されており、未整理の状態となっている。 名古屋城総合事務所)と名古屋市博物館にその資料を寄贈している。資 有しており、 地氏は名古屋城の刻印・刻銘を自身で採拓した膨大な拓本資料 刻印を撮影したネガフィルム二十四本、 昭和五十年 (一九七五)前後に名古屋城管理事務所 名古屋城総合事務所が軸装七幅、 刻印調査のメモノー (現・

名古屋市博物館所蔵資料(以下、「市博資料」という)と名古屋城総名古屋市博物館所蔵資料(以下、「名城資料を内部の受入番号順に紹介していく。正れらのことを踏まえて、名城資料を内部の受入番号順に紹介していく。 これらのことを踏まえて、名城資料を内部の受入番号順に紹介していく。 これらのことを踏まえて、名城資料を内部の受入番号順に紹介していく。 これらのことを踏まえて、名城資料を内部の受入番号順に紹介していく。 これらのことを踏まえて、名城資料を内部の受入番号順に紹介していく。 これらのことを踏まえて、名城資料を内部の受入番号順に紹介していく。 これらのことを踏まえて、名城資料を内部の受入番号順に紹介していく。 とれらのことを踏まえて、名城資料を内部の受入番号順に紹介していく。

名古屋城所蔵の川地義郎氏採拓拓本

Ⅰ 石垣拓本「はちすか内いなミ与太郎」(図1)

軸装:縱一三四·五 cm、横三九·五 cm

本紙:縦五二·三 cm、横三二·五 cm

る。「いなミ」は「いなた」(稲田修理亮示植)が正しい。料にも同一箇所の拓本資料があり、採拓の角度などもほぼ同じであ内いなミ与太郎 昭和四十九年三月八日」と記されている。市博資巻止部分に貼付けがあり、「東北隅櫓やゝ西の下石垣 3 はちすか

2 石垣拓本「山内左太」(図2)

軸装:縱一二一·五 cm、横四一·○ cm

本紙:縦四○・○ cm、横三○・五 cm

巻止部分に貼付けがあり、「西之丸西側石垣中段(うの首南)1.

□山内左太」と記されている。

3 石垣拓本「三葉柏紋とうずまき紋」(図3)

軸装:縦一二○・五 cm、横六五・○ cm

本紙:縦三三・○ cm、横五七・五 cm

巻止部分に貼付けがあり、「東南隅櫓東の掘北へ西側石垣中程 5

(三葉柏紋)字あり(うずまき紋)松平土佐守の紋」と記されている。

4 石垣拓本「すミはせ川」(図4)

軸装:縦一四一・○ cm、横五五・九 cm

本紙:縦六五·五 cm、横五一·○ cm

巻止部分に貼付けがあり、「東北隅櫓やゝ西の下石垣 2 (丸の内に

二つ引両)すミはせ川」と記されている。

5 石垣拓本「松平土佐守」(図5)

軸装:縱一四四·五 cm、横六四·二 cm

本紙:縦五三・六 cm、横五○・七 cm

平土佐守」と記されている。 巻止部分に貼付けがあり、東南隅櫓東の堀北へ西側石垣中程 4 ぬ

6 石垣拓本「林 阿波守内」(図6)

軸装:縦一二七·五 cm、横四三·一 cmイガガス・林・阝沙号阝」(图))

本紙:縦四五·三 cm、横三二·五 cm

巻止部分に貼付けがあり、「西鉄門北うの首東側下石垣 7 林 阿

7 石垣拓本「阿波守内林内膳組」(図7) 波守内」と記されている。

軸装:縦一四四·三 cm、横三九·八 cm

本紙:縦五九・二 cm、横三三・六 cm

巻止部分に貼付けがあり、「西鉄門北うの首東側下石垣 阿波宮

□ 林内膳組」と記されている。

8 石垣拓本「松平土佐守Ⅲ」(図8)

未装:縦一二五・五 cm、横六○・三 cm

装された拓本があるため、川地義郎資料として間違いないと思われ装された拓本があるため、川地義郎資料として間違いないと思われ者も「川地義郎?」となっている。ただ、市博資料に同一箇所で軸名城資料では唯一未装で一点として登録されている資料で、寄贈

9 石垣拓本資料 一式(図9~11)

未装:縦三三 cm、横二四 cm×二十枚

縦五四 cm、横三二 cm×二枚

縦六八 cm、 横六八 cm×三

葵紋の瓦当の拓本資料も一式に含まれている。 ている。 でどの刻印があるのか記録 入れられている。このほか、 これまでの軸装のものと比べて小ぶりの刻印のみの拓本が を撮影したネガフィルム二十四本、 石垣とは関連がないが、陸軍期の碑文 (おそらく一部) 詳細は未確認だが石垣 城内石垣を巡りながら一m単位 したノート二冊が寄贈され 〈大村〉 「増築射ゟ出碑」 (おそらく刻印・刻 一式で受け の拓本、

石垣修理碑の拓本について

のはずだが、 墨色が濃い。 同じ拓本が名古屋市博物館・名古屋城総合事務所双方にあって、 江戸時代後半、 周知されているともいいがたい。 碑文は『金城温古録』 文化二年 (一八〇五) 御深井丸に収録され、 の御深井丸修理碑拓本があり、 知られた史料 後者の

は記録として貴重である。 れて年が浅く、 命を受けたのが文政年間 風化のため文字が薄く、 はるかに鮮明だったと考えられる。『金城温古録』 川地拓本でも読みづらい 八一八~一八三〇)とすれば、 図 12)。 碑文は彫ら 奥村が藩 銘文

城温古録』に 記なり」とあった。 の石垣の面長三尺巾二尺はかりの石に彫刻せる字あり主宰御作事奉行の [隅)、 碑文所在地には説明版もなく、 (西方)、 樹根の下に銘文石がある 土居上り口、 「御深井丸南土居東端芝坂の辰巳の所を入隅に築ける北側 御深井丸透門通路 手前側に低い段があり、 図 13 碑文の所在に気づく人は少ない。 俗称 「鵜の首」)を北に渡って その入隅石垣 『 金 北

『金城温古録』 では松下□之右衛門の名が脱落となっている。 「以下日

> た。 当箇所は得義自筆である。 割愛したと考えられる。東洋文庫本は安政五年までに成立しており、 を異にするため朱墨かと推量する その写しである名古屋城本には記述がない。 雇 (草稿本)とその写しである鶴舞本にあって、 の頭なり」とある注記は拓本にはない。 WEB閲覧できる鶴舞本はモノクロで、 (東洋文庫本もモノクロ写真によっ 注記は金城温古録東洋文庫本 注記だったため浄書の際に 蓬左文庫本 (清書本)や 墨色 該

石垣北上巾十七間、 高 二間者無傾危、 及、 不及修繕 東上巾· 十五間 一破損 加重修也、 北東隅下 巾 四

間

文化二乙丑歳七月

小山 杉浦忠太郎 黒田文右衛門 清兵衛

鈴木五兵衛 天野佐助

加藤治平

松下□之右衛門 津村源吾

鷲見只八

羽田野弥三郎

井上長兵衛

半四郎 治右衛門

鉄四郎 太兵衛

ため、 る 十五間の破損箇所、 積み直しをせずにそのままにして修理しなかった、 箇 所の記述については難解だが、 ただし隅角は高さ三間、 対象地は北上巾十七間と東上巾 幅四間半は 「傾危」がない と書かれてい

誌」、「飛騨編年史要」に見える。 記事が見える。 文化財保護室・名古屋城管理事務所) た。『名古屋城石垣災害・補修一覧』 の前年七月頃に大型の台風が尾張、 古屋叢書』三編1巻 「桜井村史」、「三河國西加茂郡誌」、 埋 の履歴・箇所がわかる石垣は少ないので、 災害が八月二十八日発生だったことは (御系譜) (一六二頁) 修理については 三河から美濃・飛騨にかけて通過 「飛騨編年史要」などに記述の被害 (平成一四年度名古屋市教育委員会 に関係史料があり、 に 貴重な記述である。 「尾張徳川家系譜」『名 「三河國西加茂郡 「朝日村誌」、

文化元子八月廿八日、 如元御修補候様ニとの奉書出 尾州御石垣孕或崩候付而御築直之儀御達有之候 ル

決定、 この修理工事のおそらく全てであろう 二年修理碑文は記載されない)。 幕府の承認もなされて、 この日付は災害で石垣が孕み、 翌二年七月に竣工した。 (なお右記修理一覧にはこの文化 崩れた日である。 御深井丸石垣は 修理の方針 が

下日雇の頭なり」と注記した。 分である。 衛門には碑文に小さく「大工」と注記がある。続く四名に奥村得義が 位署者冒頭の三人が普請奉行で、 下段は上から続く訳ではなく別記で、 治右衛門、 つづく八人はいずれも苗字があり士 半四郎、 全員苗字がない。 太兵衛、 鉄四郎 の頭

> 部 う言葉が残っている。 【本紀要 服部4-2日雇・黒鍬を参照されたい】 〈服 は名古屋地方に「ひよかた」「ひよとり」「ひよたび 人の配下に「日雇」がおり、 彼ら「日雇」が石垣を実際に築いた。 (地方足袋)」とい 「日雇

四

おわりに

うちがいがある。 いう方法だったが、 み取った形を取るから、客観性は若干弱くなる。 を行なっていたことはほとんど知られていない。 異なって川地義郎氏は著書を刊行しなかった。 石垣刻印については高田祐吉氏の研究蓄積が著名であるが、 前者には主観が入りにくい。 高田氏は独自の方法で字形を読みとっている、 同時代に二人が同じ作業 後者は読みやすいが、 川地氏は通常の拓本と 高田 とい 読

未表装がある。 清正関係の拓本もあるが、 西南隅櫓木材の拓本二軸があり、 名城資料には川地氏採拓紙が、 また川地氏以外にも長谷川甫斉氏採拓の天守・東南隅櫓 その採拓者は不明である。 軸装のもの、 やはり軸装されている。 額装のもの、 天守台の加藤 一枚もので

とどめるが、 これには相当な時間を要しそうである。 川地氏は野帳も残しており、整理できれば拓本採拓地も 今後も継続して名城資料と市博資料の整理・報告を行って 今回は名城資料の一部の報告に 確定できるが、

参考文献

高田祐吉 2013「名古屋城の丁場割と石垣の刻印」『新修名古屋市史 資料編 考古2』名古屋市 高田祐吉 1999『続・名古屋城叢書2 名古屋城石垣の刻紋』財団法人名古屋城振興協会 高田祐吉 1989『特別史跡名古屋城天守台石垣の刻紋』 財団法人名古屋城振興協会

《Title》

Marks and Inscriptions on Nagoya Castle (Part 1) - Materialsdona donated by Mr. Kawachi Yoshiro





図1 石垣拓本「はちすか内いなミ(た)与太郎」

図2 石垣拓本「山内左太」



図3 石垣拓本「三葉柏紋とうずまき紋」



図4 石垣拓本「すミはせ川」

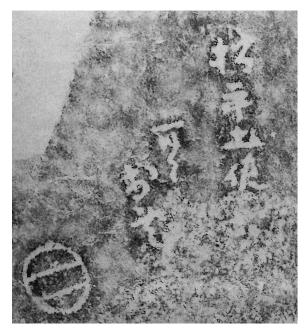


図5 石垣拓本「松平土佐守」(百々出雲)



図6 石垣拓本「林 阿波守内」



図7 石垣拓本「阿波守内林内膳組」



図8 石垣拓本「松平土佐守皿」



図9 石垣拓本資料 一式①



図 10 石垣拓本資料 一式②

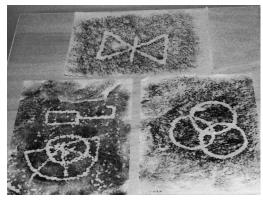


図 11 石垣拓本資料 一式③



図 13 文化二年石垣修理碑現況



図 12 文化二年石垣修理碑拓本資料 (名古屋城総合事務所所蔵)